

編集者粕谷一希と『中央公論』

—「現実主義」論調の潮流をめぐって—

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 根津 朝彦

はじめに

中央公論社は一九六五年の創業八〇年を記念して「言論史上はじめての、論壇を対象とする」(六五年五月号一七八頁)吉野作造賞の創設を発表した¹。実際の受賞者を選定したのは六六年からで、以降、坂本義和、衛藤瀋吉、永井陽之助、萩原延寿、永井道雄、入江昭、宮田光雄、宇沢弘文、蠟山道雄、松下圭一、村上泰亮、三谷太一郎、宮崎勇、細谷千博、松山幸雄、高坂正堯ら数多くの受賞者が選ばれた。松本重治によれば、この賞を発案して実行したのが粕谷一希であったという(八五年一月号八〇頁)²。そして粕谷は、これら多くの執筆者と交流があった。

本稿では、この編集者粕谷一希を通して『中央公論』にいか「現実主義」の論調が台頭していったのかを明らかにする。ここで想定する「現実主義」論調とは、勢力均衡、権力政治、軍事力の側面を重視した外交論(国際政治学)を指す。その「現実主義」論調は、高坂正堯が『中央公論』六三年一月号に発表した巻頭論文「現実主義者の平和論」をもって嚆矢とする。この題名こそ高坂自らが名づけたものであった³。以降、『中央公論』を中心に現出した思潮を「現実主義」論調として取り上げたい。

さらに後述のごとく戦後総合雑誌の編集者の中で、粕谷一希ほど保守的知識人の結節点にある人物を見出すことは難しい。そういう意味で、粕谷一希を中心とした人的系譜を追うことで、同時に戦後の保守的知識人の潮流をも浮き上がらせることになろう。

本論の独自性は、ある一つの論調が形成される過程を、知識人からだけでなく、具体的な編集者の関わりと思想を通して解明する分析視角の新しさにある。編集者の回想にしても「文壇」関係のものが多く、「論壇」に関しては鷲尾賢也『編集とはどのような仕事なのか』(トランスビュー、二〇〇四年)や大塚信一『理想の出版を求めて』(トランスビュー、二〇〇六年)などが刊行されてきているが、戦後「論壇」に携わった編集者自体の研究は皆無と思われる。一人の編集者が総合雑誌においてどのような企画を行ってきたのか、そして一編集者はどのような人脈を構築するのか、そうした事例研究そのものが極めて不足してきたと考える。それだけに多数の書物を著した粕谷の仕事は資料的にも貴重であり、興味深い。とりわけ本論で扱う「現実主義」論調の系譜に連なる国際政治学者らの同時代のジャーナリズムにおける影響力を顧みるならば、その戦後の潮流の所在を検討することには大きな意義があろう。

本稿は以上の目的と方法に基き、一「粕谷一希の思想形成」、二「中央公論社時代の編集企画」、三「『現実主義』論調の登場と展開」から構成される総合雑誌の編集者試論の性格をもつジャーナリズム史研究である。

一 粕谷一希の思想形成

本節では、まず彼が中央公論社に入社するまでにどのような著書や人物に出会い影響を受けたのかを中心にその思想形成を明らかにする。粕谷が『中央公論』編集部次長時代に「現実主義」論調の論文を

掲載するに至る知的背景を理解するためである。敗戦体験の衝撃とそれによる読書傾向の転換が、「保守的懐疑派」⁴と自称する粕谷の反時代的な趣向を決定づけたと述べている。ここでは俯瞰を目的とし、各著書の内容にまでは踏み込めないことを断っておく。内容分析については三節の「現実主義」論調の論文を対象としたい。

粕谷一希は一九三〇年二月四日生まれである。東京の雑司ヶ谷で育った（都会 一九二～一九五頁）⁵。粕谷の著書には家族に関する記述は少ないので、最低限度のことしかわからない。一番詳しい記述は、父親は「株屋と自嘲する証券会社のサラリーマンで市場経済論者であった。埼玉県没落した家の五男坊だった。秋田県出身の母とともに東京人になろうと懸命だった。高台の家に住むのを生涯の夢としていた」⁶というものである。父は「阪急電鉄や宝塚を運営してきた小林一三のファンであり官僚嫌いであり、アジア太平洋戦争中は早期降伏論者だった（吉田 一八六頁）。

粕谷はこの父親と生涯対立が消えなかったと述べている⁸。その明確な要因は定かではないが、関係しそうな記述が少なくとも三つある。第一に、旧制第一高等学校（以下、一高）時代に文学部に進学するならば父は金は出さないと述べていたこと（作家 三七頁）。第二に、大学で留年した頃を指すものかもしれないが、冷戦状態にあった父が社交上からかダンスを覚えるなら授業料を出すと述べていたこと（遠藤 二四五頁）。第三に、結婚のときに両親と多少のいざこざがあったことである（東京 二六一頁）。父は「妙に他人に同調しない風があり」⁹、母は秋田県生まれで「東北の人々は、おおむね頑固で一徹で、正直で感激性が強く、愛情が濃い」（高杉 七三頁）といった表現に、両親の影響で一定程度培われた粕谷の「保守的懐疑派」と通じる頑なさを推測することができよう¹⁰。

学生時代は、東京府立第五中学校（四三年入学、現在の都立小石川高校、以下五中と略記）¹¹、一高（四八年入学）、東京大学法学部（五〇年入学、五五年卒業）で過した。何度も粕谷が言及しているように彼自身にとって最も強い影響を受けたのは、一五歳で迎えた敗戦の衝撃であった。一九四五年四月一三日の空襲で雑司ヶ谷の家と駕籠町の五中を「一晩のうちに焼かれた衝撃と喪失感が、私の人生の出発点」（吉田 二八三頁）であり、「敗戦のショックは、決して観念的なものではなく、私にとっては、昨日まであったものが今日なくなるという目に見える形の衝撃だった」（作家 一七頁）。特に粕谷にとって戦争中「軍国主義にファナティックになったから、ファナティックなものへの嫌悪が最も大きい」（作家 一一二頁）要素となる。

それは次のエピソードによく示されている。敗戦直後の粕谷は、日比谷公会堂で満員の聴衆の中、児玉誉士夫の講演会を聞きに行く。戦時中に活躍した愛国者のイメージを粕谷は児玉に抱いていたが、その児玉の「なんの懐疑も反省もない」祖国再建の情熱的な演説に失望した。「そこにはかつて戦局が非勢となるにつれて、ファナティックになっていった幼い憂国者の、級友たちをアジった自分の姿と等質な姿があり、自己嫌悪とともに「私はもう二度とこうした場所に足を運ぶことを止めようと思った」のである（河合三～四頁）。

そこから戦後の彼の精神的彷徨が始まる。「私自身は幼くして戦争にコミットした感情を抱いたために、戦後の平和運動、政治運動にコミットできなくなり、極端に臆病な存在となってしまった」（東京 七六頁）、「戦後、文学少年だった私は、極端に懐疑的な哲学少年となり、非政治的人間として生きようとしたことは、戦時下の自分への自己批判であり、戦後のマルクス主義の流行に終始非同調だったのも、そこに高度の政治性を嗅ぎとったためであった」（吉田 二八三頁）、「それから中学・高校・大学と、極端に懐疑的な人間として青春を送った」（中公 一三頁）と、いずれも「極端に」という言葉が繰り返されているところに粕谷の人生を大きく規定した敗戦体験の刻印の深さがうかがえる。

府立五中時代には同級生に後に『偉大なる暗闇』(新潮社、一九八四年)などを書いた高橋英夫がいるが¹²、とりわけ粕谷が私淑したのは国文学の教師真田幸男である(作家一六頁)。真田は敗戦に打ちひしがれた生徒のことを思い、卒業生である東大生と一高生に懇談を依頼した。その敗戦の秋の放課後、五中の生徒に東大生が静かな口調で情熱をこめて語ったのは学生生活、青春、自我の目覚め、教養、哲学、人格の完成、真の学問といった河合栄治郎『学生に与う』の内容であった。それまで「漠然と偉くなりたいと思っていた」粕谷は「全身がしびれるような衝撃を受け」、「東大生との対面で百八十度、転回した。私は、自我という言葉、人格という言葉初めて耳にし」、戦中に軍国主義を批判した「戦闘的自由主義者が、この世に実在したことを知ったのである」。これにより粕谷の周辺は一種の河合栄治郎ブームが起き、粕谷も河合の本を求め、「焼跡の古本屋を、早稲田に、神保町にと、夢遊病者のように歩きまわった」(河合四～七頁)。

もともと粕谷は文学少年であったが、河合体験により哲学少年の道に誘われ、岩波文庫が学生叢書に代わった(作家二四頁)。敗戦体験で「自分の中に確かなものを持っていないから、と確信」し、人のいうことを安易に鵜呑みにしないことを粕谷は誓っていたし(作家一七頁)、世の中の事象に「なぜなのか疑問を抱き、自分が納得しないかぎりテコでも動かない」ことを河合の学生叢書に教わったという(今甕二五頁)。一高の先輩の「人間というものは、あした地球が滅びても、自分が納得しないことには同調しちゃいかん」(作家一八頁)という発言にも忘れられない印象を受けている。

粕谷の以後の読書体験を大まかにいえば、河合栄治郎、和辻哲郎、波多野精一、京都学派、猪木正道、蠟山政道、丸山眞男らの間で揺らぎ、非マルクス主義に位置する立場を形成していったとあっていい。各書物にいつ出会ったか詳しい時期はわからないものもあるが、概ね「昭和二十年から昭和二十六年まで、六年ほどの読書遍歴」(中公一四頁)の間であり、大学入学頃に読書に飽きていたという記述(作家四一頁)もあることから、敗戦以降の五中と一高の時期の読書経験が粕谷の中心思想を構築したと考えられる。

河合栄治郎の学生叢書により哲学に興味をもち(作家二六頁)、真田幸男の自宅を訪問して和辻哲郎『偶像再興』を借りて強く引かれていたこともあり(対比一四、二五七～二五八頁、東京一三三～一三四頁)、和辻哲郎の倫理学に進んだ。四七年春、中学四年で一高の試験には落ち、受験翌日から和辻の『人間の学としての倫理学』を読み始め、倫理を人間関係でとらえる和辻の考え方に引かれ(作家二七～二八頁)、「学生時代、私は和辻哲郎氏の著作から深刻な影響を受け」と述懐する(中公六〇頁)。次に波多野精一の『宗教哲学』に傾倒する(作家二九～三〇頁)¹³。この点では粕谷は、河合の「自己実現」よりも、波多野の『「他者実現」としての宗教性』と和辻の「人間関係の倫理性」によって生まれる社会的営為を重んじている(河合二三七～二三八頁)。

四七年にベストセラーになった一高生の入水自殺の遺稿集である原口統三『二十歳のエチュード』を中学生のときに読み、権利と正義「この二つの単語が人類の辞書から抹殺されぬ限り、永久に戦争は絶えないだろう」といった警句の数々に「目の眩む想いを覚え」た(遠藤九～一〇、一八〇～一八一頁)。また粕谷は、戦中『中央公論』の座談会「世界史的立場と日本」に出席した高坂正顕、鈴木成高、西谷啓治、高山岩男を中心として敗戦後「戦前、戦中の日本人を全否定するような論説」に疑問を覚え、戦中のかれらの本を丹念に読む。敗戦直後頃の古本屋においてかれらの本で最初に入手したのは鈴木成高『歴史的国家の理念』、次に西谷啓治『世界観と国家観』、それから高坂正顕『カント』、同『歴史的世界』、同『神話』だった¹⁴。

五中在学中か一高入学後かはわからないが、四八年には東大法学部の学生であった先輩から粕谷は丸

山眞男の「超国家主義の論理と心理」を読んだときの衝撃とその存在を教わり、以降雑誌に丸山の名が認められれば全て入手して読み耽った（作家 三八～三九頁）。一高時代は森鷗外に「全神経と感受性を傾けて」おり、文学の奥行に対する認識と歴史小説の愛好も深めている（唐木 七九、一〇二頁）。

以上の敗戦体験と読書体験からうかがえることではあるが、粕谷に一貫して通底したものはマルクス主義への違和感であろう。具体的に粕谷がマルクス主義になじめなくなった要因として、敗戦の衝撃以外では、第一に、和辻哲郎の『倫理学』で展開されたフォイエルバッハとマルクスの解釈で「神が人間をつくったのではなく、人間が神をつくった」というフォイエルバッハの和辻の解釈に「読んでいて涙を流したほど感動した」こと（作家 一一一頁）。第二に、原口統三が敬意を抱いていた中野徹雄が一高の『向陵時報』に発表した「汝は地に」というエッセー（作家 一一〇～一一一頁、遠藤 一七〇頁）。第三に、河合栄治郎の共産主義研究を引き継いだ猪木正道の『ロシア革命史』、『共産主義の系譜』、『ドイツ共産党史』の三部作で「目の覚めるような衝撃と多大なる影響を受けた」こと（作家 一一〇頁）。「共産主義運動の体系的理解と批判的見地を獲得」させてくれた猪木は「私の思想上の恩人といってよい」と述べている（東京 一二五頁）。第四に、鈴木成高の『ランケと世界史学』による影響（対比 一三二頁）。第五に、「学生時代、私は魅力的なマルクシスト、コミュニストというものに、ついに出会ったことがなかった」（遠藤 二四頁）ことがあげられよう。

それと合わせて粕谷は「進歩主義の実質は、社会党・共産党の統一戦線（人民戦線）であり」、共産主義の反対者を「右翼・反動呼ばわりする排除の論理を持つ組織原理に立っている」のではないかという疑問を抱き続ける（中公 三一頁、河合 二二頁）。そのように見なす粕谷にとって清水幾太郎は「反体制運動」、丸山眞男は「反・反共主義」、久野収は「市民主義」、鶴見俊輔は「無政府主義」の範疇に映り、かれらは総じて「社共統一戦線、人民戦線の同伴者、同調者」であり、特に丸山眞男「ある自由主義者への手紙」（『世界』一九五〇年九月号）と鶴見俊輔「自由主義者の試金石」（『中央公論』一九五七年六月号）の主張に違和感を募らせたのである（中公 一〇〇～一〇一頁）¹⁵。

一高時代は、竹山道雄からもドイツ語を教わり、粕谷はドイツ語の文科乙類に在学したが、同級生には本間長世（アメリカ政治学）、芳賀徹（比較文化）、高階秀爾（美術史）、清水徹（仏文学）らがいた（作家 三四～三五頁）¹⁶。いつから購読していたかわからないが、休刊になるまで唯一愛読していたのは『展望』であった（東京 八二頁）。「京都学派哲学の流れを筑摩に導入し、歴史、哲学、文学の出版に思想的骨格」を与えた筑摩書房の顧問である唐木順三（唐木 三二頁）、創文社の顧問をしていた鈴木成高（対比 一三二頁、唐木 一六三～一六四頁）に編集者としての力量も認めている。

東京大学法学部時代は、講義には興味をもてなかったが、「国際関係論とか国際政治というのが登場しはじめた頃に大学に行き、「学生時代、E・H・カーとかモーゲンソーによっていろいろ刺激を受けました」（対談 八五頁）というのは、後の「現実主義」論調の編集に関係しよう。前述の通り読書にも飽きていた彼は友人から声をかけられ、反全学連の学生団体である土曜会の雑誌編集長を引き受けた。その雑誌は『時代』と命名された。それは遠藤麟一郎の編集の下、中野徹雄、いいだもも、中村稔、マチネ・ポエティック、吉行淳之介らの寄稿者を擁し、「高貴な精神への憧憬、純粹思惟の徹底」（遠藤 二〇八頁）を志向した『世代』に粕谷が憧れをもっていたからである。『時代』には佐々淳行などが集っていた（中公 一四～一五頁、作家 三八～四六頁）¹⁷。

東大在学時代には社会科学よりも人間学という考えで、アントロポロジスト同人を結成しようとして指導教官になってもらうために林健太郎の荻窪善福寺の家を訪ね（唐木 三三頁、東京 八一頁）、『詩とデカダンス』（創文社、一九五二年）を書いた唐木順三と明治大学の研究室で面会し（対比 一二四頁、唐木 三三頁）、

鈴木成高「の許へよくお邪魔するようになり」「随分お宅でごちそうになり」（対談 二五四頁、唐木 一六四頁）、『時代区分の成立根拠』（筑摩書房、一九四九年）に感動して大島康正の成城の家に訪問して（唐木 五七頁）、それぞれ知遇を得ている。

結局その『時代』の編集長を務めることで編集の面白さを実感した粕谷は、編集作業に没頭し、卒業単位が足りず一年留年する。一般就職には興味もてず、粕谷は筑摩書房に就職したかった。たまたま友人に声をかけてもらい、筑摩書房の竹之内静雄に面会できることになった。粕谷は『展望』を再刊して編集に当たりたい旨を述べる（東京 二五四頁）が、竹之内から筑摩書房よりも経営の安定している中央公論社を薦められ、中央公論社の広告担当重役の宮本信太郎を紹介された（中公 一五～一六頁、作家 五五～五六頁）。筆記試験を通り、面接で最近の『中央公論』で面白かったものは何かと問われて、福田恆存の「平和論の進め方についての疑問」（五四年一二月号）をあげた。大学時代に興味を引いた講義はと聞かれて、岡義武のヨーロッパ政治史、尾高朝雄の法哲学、蠟山政道の国際政治と、講義は聞けなかったが丸山眞男の日本政治思想史と答えた。粕谷の推薦人は高山岩男で、中央公論社の社長嶋中鵬二の岳父が蠟山政道とは知らずに「蠟山政道氏の三部作について」という小論文を提出した。粕谷は他に就職のあてがなく、しばらくしても合否の通知が来なかったため、直接嶋中鵬二の家を訪ね直談判を行う。それがどう作用したかはわからないが、五五年に入社が決まったのである（中公 一六～二〇頁）。小学校で一年休学し、高校で一年落第し、大学でも一年留年した粕谷は二五歳になっていた（作家 五八頁）。ここに中央公論社編集者としての粕谷一希の歩みが始まる。

二 中央公論社時代の編集企画

二節では粕谷が中央公論社に入社してから企画もしくは担当した編集論文を列挙して、粕谷が目指した編集の全体像を提示するとともに、「風流夢譚」事件以後の『中央公論』の論調に粕谷が果たした役割を明らかにする。さらに粕谷の編集の定義である「筆者とテーマの選択的構成」（編集 一三頁）に、中央公論社社長の嶋中鵬二との思想的親和性と同社が培ってきた人脈の合流を見ることができよう。

中央公論社時代において粕谷は、校閲部、『中央公論』編集部、『婦人公論』編集部、出版部で主に『思想の科学』担当、『中央公論』編集部・編集部次長・編集部長、『歴史と人物』編集長、『中央公論』編集部長、『中央公論経営問題』に在籍し、七八年に退社する。

嶋中鵬二編集長の下、五五年七月から五七年二月まで在籍（中公 六三頁）した『中央公論』編集部で粕谷が最初に原稿依頼をしたのは林健太郎で、林が書いた「世界史の転換をいかに理解するか」（五五年一〇月号）は巻頭論文を飾る（中公 四四～四五頁、作家 七四～七五頁）。後の粕谷の文章で「戦後日本の社会科学全般が、マルクス主義との折衷主義的発想に立っていることを繰り返し批判しつづけ、観念的非武装中立、平和論に異議を唱えつづけた点で、哲学の田中美知太郎、政治学の猪木正道、文芸批評の福田恆存などと共に、数少ない保守派知識人の代表的存在となった」（思潮 二〇五頁）と林健太郎を評価しているところから見ても、粕谷の最初の仕事が林から展開されたことは象徴的であった。次号の五五年一〇月号は中央公論社の七〇周年の特大号であり、その巻頭論文である笠信太郎「政治はなぜまずいか」の担当を粕谷は命じられている（中公 四六頁）。同号のために懸賞応募論文の下読みをした粕谷は、学生時代に編集した『時代』に掲載した佐々淳行の「平和論における認識と価値判断」を佐々に修正させ、佐々論文は佳作に選ばれる（中公 四九～五〇頁）。さらに入社後、蠟山政道を粕谷がずっと担当することになった（作家 五七頁）。

その頃『中央公論』に和辻哲郎「桂離宮印象記」(五五年一月号~同年八月号)が連載中で、嶋中編集長に頼み込んで和辻担当にしてもらった。和辻宅に半年通い、粕谷の粘り強いアプローチで生まれたのが、和辻の死去で中断してしまう「自叙伝の試み」(五七年一月号~五九年九月号、和辻「一高生活の思ひ出」は五九年一〇月号~六〇年一月号)である(対比 二五七頁、中公 六〇~六二頁)。次の職場『婦人公論』編集部には五七年三月から五八年六月頃まで在籍し(中公 六三頁)、その時期に小野津幸子と結婚する。小野津は金沢出身で、金沢女子専門学校から慶応大学の国文へ編入して、『文藝首都』の同人であり、池袋で芝居をやっていた(作家 四六頁)。粕谷は最初は嶋中に頼んだが、社員の仲人はしないということだったので、林健太郎に仲人を務めてもらった(中公 八五頁、作家 七六頁)。

その後五八年七月に出版部に異動し(中公 七〇頁)、中央公論社版として創刊される『思想の科学』(五九年一月号が創刊号)を主に担当する。出版部では『蠟山政道評論著作集』全六巻(一九五九~一九六二年)を担当し、林健太郎『現代社会主義の再検討』(一九五八年)、猪木正道『民主的社会主義』(一九六〇年)も担当もしくは手伝った。なかでも蠟山の「発想や行動、人柄や識見に触れることができたのは、私の生涯の幸福であった」(河合 二一頁)と述べている。結局、後述するように「風流夢譚」事件が起きて、粕谷は『中央公論』編集部に移り、座礁してしまっただが、出版部では二つのプロジェクトも彼が担当していた。一つは蠟山政道が主導して、蠟山、中山伊知郎、尾高邦雄の編集委員による現代社会科学講座の企画である。毎月研究会を開き、尾高経由で富永健一と知り合い、永井陽之助も参加していた。鶴見俊輔は、永井のアカデミックな論文に対して「明らかに嫌な顔をした」というが、粕谷はリースマンとミルズの比較論である永井の「大衆社会における権力構造」(『思想の科学』五九年一月号)を掲載している。もう一つは田中美知太郎の責任編集による哲学用語事典の企画である(中公 七九~八〇頁、作家 一〇一頁)。翻訳出版の仕事としては五中時代の友人である高橋英夫にホイジンガの『ホモ・ルーデンス』(一九六三年)を訳してもらった。一高時代の友人である本間長世にはアーレントの『人間の条件』を訳してもらう予定であったが、同じく粕谷の異動で中断してしまい、後に志水速雄によって翻訳(一九七三年)された(中公 八〇頁)。

粕谷はもともと『中央公論』編集部時代に鶴見俊輔、関根弘、武田清子による連載「日本の地下水」の担当者であった。そういう縁もあって『思想の科学』の担当者を嶋中から命じられたのだが、『思想の科学』を中央公論社から発行することには疑問であった。それに対して嶋中は「だいたい、君は左翼の人々を知らないで毛嫌いしている」と述べ、「自分はまだ修業中の身なのだと自分に言いかけせ」、個人的立場は別にして粕谷なりに仕事を続ける(中公 七〇~七二、一〇一頁)。新人の上坂冬子の投稿原稿「職場の群像」に対して「筆者の姿勢が後ろ向き」という批判もあったが、粕谷は強硬に掲載を主張し、『思想の科学』(五九年二月号~同年五月号)に連載された(中公 七四頁)。

また、永井道雄と京都に旅行したときに京大人文研の若手研究者である梅棹忠夫、上山春平、多田道太郎、加藤秀俊を紹介してもらい、鶴見俊輔には編集者として筆者との対話法を学ぶ(中公 七六~七七頁)。ただ、安保闘争時に粕谷の思想的な限界が来た。「市民としての抵抗」号(『思想の科学』六〇年七月号)は完売し会社から大入袋が出たが、『思想の科学』担当として仕事をすることに耐えられず、九月頃に担当を降ろしてもらったのである(中公 一〇四、一〇七~一〇八頁)¹⁸。ただこの「市民としての抵抗」号には、「どうしても私自身の鬱屈した想いが表現できない」ので、アメリカの留学を終えたばかりの本間長世に依頼して、丸山眞男批判の性格をもつ「ある後衛の弁」をペンネームで掲載したところに粕谷の最後の意地が見られよう(中公 一〇三頁)。

粕谷が『思想の科学』担当を降りてしばらくしてから「風流夢譚」事件が中央公論社を急襲する。浅

沼事件の冷めやらぬ『中央公論』一九六〇年一二月号に深沢七郎の小説「風流夢譚」が掲載されたことが事件の発端である。深沢が描いたのは、皇室の和歌文化の批判小説であった。しかし、夢物語の中の革命で天皇一家の首が切られるシーンが右翼と宮内庁を刺激し、翌六一年二月一日の嶋中事件を惹起する。嶋中事件は、「風流夢譚」に激昂した右翼少年が中央公論社社長の嶋中邸を襲い、嶋中鵬二は不在だったが、妻の嶋中雅子に深手を負わせ、家事手伝いを殺害した言論テロ事件である。同社は『中央公論』に「言論の自由」を呼びかける「社告」と同時に「風流夢譚」掲載は不適切であったとする「お詫び」を載せる混乱を見せ、ジャーナリズム上の「言論の自由」を守れという掛け声とは裏腹に、全体的に天皇制批判の自主規制を大きく進展させることになった¹⁹。

まず「風流夢譚」掲載の混乱で、竹森清編集長と橋本進次長らが事実上更迭され、六一年一月一日付で粕谷一希と綱淵謙錠が『中央公論』編集部に移動する（中公一〇九頁）。この異動の真意を京谷秀夫は、嶋中の「より多く信頼できる人間、すなわち腹心を編集部に送り込むということであったろう」と述べている²⁰。嶋中事件が起き、嶋中の『中央公論』編集長兼務を解き、笹原金次郎が編集長となる。事件以後、中央公論社の幹部は、役職を多数兼務していた嶋中に休養を勧めた。嶋中はその提案を呑む代わりに、条件の一つとして粕谷を『中央公論』編集部次長にすることを重役会議に要求した（作家一一六頁、中公一一六頁）。こうして粕谷は三一歳の若さで次長に抜擢されるとともに、「風流夢譚」掲載時のもう一人の次長である京谷秀夫は配転となった。遅れて綱淵も次長になる。編集長の笹原金次郎は文芸畑の出身で、谷崎潤一郎担当の綱淵は「文壇」関係を引き受けていたので（中公五九、一二五頁）、「論壇」方面の誌面構成は粕谷が主導したとあっていい。

以降、嶋中事件に『中央公論』は直接向き合うことを回避し、粕谷は「これ以後ほぼ一年近く、私は嶋中さんから常々聞かされていた学者の方々を巻頭に掲げ」続ける（中公一二二頁）。嶋中事件から約一ヵ月後の六一年三月八日には、『思想の科学』担当の中村智子が粕谷に「『中央公論』が右寄りになるという噂があるけど」と触れると、粕谷は激昂し「今まで左寄りだった証明を一つだけしまししょうか。雑誌の贈呈名簿を見てごらん下さい。チンピラ左翼ばかりだ。信頼できるのは実務家だ。中公が右寄りになるなんて噂している連中にはイライラすることばかりだ」と憤った²¹。

粕谷自身は「右旋回ではなく正道に戻しただけ」（作家一一九頁）という思いで、巻頭論文にそれぞれ田中美知太郎「政治における非合理的要素」（六一年四月号）、中山伊知郎「日本の工業化と日本の民主化」（同年六月号）、尾高邦雄「産業の近代化と経営の民主化」（同年七月号）、蠟山政道「日本の近代化と福祉国家の建設」（同年八月号）、喜多村浩「世界経済の指導原理」（同年九月号）、松本重治「現代日本の国際的地位」（同年一〇月号）、青山秀夫「経済社会における混合体制のすすめ」（同年十一月号）を掲載したのである。喜多村と青山の経済論文は、都留重人ばかり重用されることに不満だった粕谷の批判的行為であった（中公一二二～一二三頁）。中でも尾高が『中央公論』に論文を執筆するのは、一九三五年の夏以来であった。二〇代後半で雑誌論文を書いたことに対して主任教授には嫌味をいわれ、岳父の和辻哲郎からも「こういうものはまだ書く必要がなかった」と注意される手痛い経験が尾高を拘束していたからである。これを説得したのが粕谷であった。粕谷は三度目の膝詰め談判で、夜尾高の家で一杯交した後、「一般の読者にアピールするような評論を書けるものだけが本当の学者なのだ」と訴え、最後には机で泣き出してしまった。このような熱心さが尾高の心を動かしたのである（八五年二月号四二～四三頁）。

ただ、そうした「オールド・リベラリスト」に近い筆者の登用では新機軸を打ち出せず、六二年頃は一種のスランプが訪れたと粕谷は述べている（中公一三九頁）。高坂正堯、萩原延寿、永井陽之助の論文は次節以降で詳述するが、一つの転機は高坂正堯「現実主義者の平和論」（六三年一月号）であり、その

高坂がさらに奮起して執筆した「宰相吉田茂論」(六四年二月号)と、同じ号に載った粕谷の企画執筆である「日本の旧家 連載第一回高知県」で粕谷はスランプを脱出した(中公一四六頁)。

粕谷自身、次長時代(主に六一～六六年)が「一番仕事も出来たし、仕事も楽しかった」(都会二二頁)といい、次長時代に強力に押し出した執筆陣に、政治学者の高坂正堯、萩原延寿、永井陽之助、衛藤瀋吉、神谷不二、批評家の江藤淳や村松剛、劇作家の山崎正和、社会学・経済学者の富永健一、坂本二郎、金森久雄をあげている。粕谷の発案でかれらの多くは、毎月一度雑談をする中公サロンのメンバーでもあった。山崎正和はサントリー文化財団(一九七九年二月設立)をつくるに際してこの中公サロンがヒントになったという(中公一六九～一七〇、一九四頁)。

前述した以外で粕谷がこの次長時代に企画もしくは担当した論文を、高坂、萩原、永井以外で列举すると、六一年九月号の上山春平「大東亜戦争の思想史的意義」(中公一二四頁)、『放送朝日』に掲載された梅棹忠夫「情報産業論」を六三年三月号に転載(作家一八九頁)、同号巻頭論文の大岡昇平「大衆文化論をただす」(作家一六八頁)、六四年四月号巻頭論文の会田雄次「日本歴史のなかの東日本と西日本の対立」(八五年一月号四〇～四一頁)、同年六月号の小林秀雄・田中美知太郎「教養ということ」(作家一三五頁)、同年一〇月号の梅本克己「ある国粹主義者」(作家五五頁)、六五年八月号の大島康正「大東亜戦争と京都学派」(唐木五七頁)であり、おそらく六四年三月号巻頭論文の上山春平「再び大東亜戦争の意義について」や同年九月号の林健太郎「戦後史をどう観るか」も粕谷の担当であろう。

笹原金次郎から宮脇俊三編集長になってからは、粕谷は田中美知太郎より早くに紹介してもらったものの編集部内で難解とされて掲載できなかつた山崎正和に「芸術時評」(六六年六月号～六七年六月号)を連載してもらった(中公一五六～一五八頁)。六六年八月号の本間長世「現代日本の精神状況」も粕谷の担当だと思われる。六六年九月には米国国務省の招待でアメリカを視察し、帰途ヨーロッパで、フランスにジャーナリズム留学をしていた編集部の塙嘉彦の紹介で粕谷は塩野七生と出会い、彼女の文筆生活の誕生のきっかけをつくり、「ルネサンスの女たち」(六八年四月号、同年六月号、同年九月号)を掲載した(中公一六〇～一六六頁)。

その後、粕谷は『中央公論』の編集長(六七年五月号～七〇年四月号)になるが、六一年年末に起きた『思想の科学』天皇制特集号廃棄事件の余波で、労働組合から批判を浴びて、編集に専念できる状況ではなかった(作家一二五頁、中公二一七頁)。『思想の科学』事件とは、嶋中事件で被害を受けた中央公論社に対して、「言論の自由」確立の側面支援を行うために企画された『思想の科学』天皇制特集号が、発売直前で廃棄された問題である。さらに、断裁廃棄されたはずの当該号を右翼の三浦義一と公安調査庁係官に閲覧させていたことが発覚し、竹内好に代表されるように思想の科学研究会を中心とする広範囲な執筆拒否を発生させた。それは嶋中事件の被害者であった中央公論社が「言論の自由」に関する加害者に転化したことを意味している。

この事態に『中央公論』編集部の中村智子は、『思想の科学』事件に対して、真っ向から会社を批判することは困難であるし、偽善的な正論に思えたので、嶋中の岳父であり会社側にも配慮できると考えて蠟山政道への執筆依頼を思い立つ。笹原編集長からも「名プラン！」といわれ採用されたが、中村が蠟山に面会すると、次第に不機嫌になった蠟山は「こんどのことと言論の自由と、どんな関係があるの？」と拒絶し、「ほくが機嫌わるくしていたと、編集にそう言ってちょうだい！」と述べた。結局、プランは座礁し、結果として『中央公論』で同事件に取り組むことはできず、中村の中でそれは大きな負い目となった²²。しかし、中央公論社労働組合は執筆拒否解除に向けて粘り強く折衝を続け、嶋中事件以降、『中央公論』の編集に大きな役割を果し、同時に執筆拒否解除に向けた積極的な行動が見られない粕谷一

希に対して編集長を辞任する要求が高まっていく。この一九六八年の年末を頂点とする労働組合闘争²³について詳述する余裕はないが、次長時代と比べて粕谷の企画担当したものの精彩が淡くなっている印象は否めない。

わかっている範囲で企画もしくは関わったものを記すと、三島由紀夫が粕谷にもちかけた文化大革命を批判する六七年五月号の石川淳・川端康成・三島由紀夫・安部公房「われわれはなぜ声明を出したか」(作家 四~五頁)、同年九月号のM・ジャンセン・堀米庸三「ホモ・ルーデンスの哲学」(対談 二七三頁)、六八年二月号の高橋英夫の批評家デビューとなる「折口学の発想序説」(東京 一〇三頁)、三島が書きたいと申し出があった同年七月号の「文化防衛論」(作家 一六四頁)、芥川賞作品となる六九年五月号の庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」(作家 一二〇~一二一頁)、同年七月号巻頭論文の志水速雄「現代日本の不決断状況」(作家 一二一頁)がある。同年一月号の本間長世「実存哲学の正統 書評ハンナ・アレント 志水速雄訳『革命について』」や同年四月号の高橋英夫「福田恆存」、同年六月号の五中の恩師である真田幸男「異色ある一公立校の思い出」なども粕谷の担当であったと考えられる。

その後は、『中央公論』編集長を退き、『歴史と人物』の創刊編集長時代の仕事では、連載した文章が、石光真人〔編〕『ある明治人の記録 会津人柴五郎の遺書』(一九七一年)、白川静『孔子伝』(一九七二年)、松本重治『上海時代』上中下(一九七四~一九七五年)としてまとまる(作家 一五〇~一五二頁)。この編集長の期間は「中央公論社編集者時代でもっとも充実した三年間だった」という(中公 二一七頁)。同誌では唐木順三と鈴木成高の対談も実現させている(対比 一二〇頁)。二度目の『中央公論』編集長時代(七四年三月号~七六年一二月号)では山口昌男の連載文章中の天皇制に関する内容が社内で問題となり、編集長を解任させられる(中公 二三六~二三八頁)。事件で辞める形を取りたくなかったため、『中央公論経営問題』の編集に最後は携わって、同誌七八年春季特別号に吉田満「戦後日本に欠落したもの」(吉田 九頁)などを企画して、七八年に退社する。粕谷が関わった単行本で三〇万部以上の大ヒットしたものには庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』(一九六九年)と丸谷才一『文章読本』(一九七七年)があった(作家 一八〇頁)。

退社以後は、江藤淳に薦められて、なぜ編集者になったのかその原点の追求として遠藤麟一朗らの『世代』の群像を『二十歳にして心朽ちたり』にまとめた(作家 二〇七頁)のを皮切りに、著作活動に専念する。また、編集者の能力を買われ、『東京人』や『外交フォーラム』の編集長も務めたし、『竹山道雄著作集』全八巻(福武書店、一九八三年)、『猪木正道著作集』全五巻(力富書房、一九八五年)、『高坂正堯著作集』全八巻(都市出版、一九九八~二〇〇〇年)の企画と出版にも携わった(東京 一一一頁、一二三頁、編集 一三一頁、作家 二六三頁)。

このように粕谷の編集遍歴を総覧していくと、自身が影響を受けた著者(和辻哲郎、蠟山政道、猪木正道)や面識のある著者(林健太郎、大島康正、唐木順三、鈴木成高)ら先行世代に原稿を依頼し、それとともに先行世代の弟子筋(高坂正堯、山崎正和、富永健一)を紹介してもらいながら、粕谷の友人(高橋英夫、本間長世)を起用し²⁴、年齢の近い同世代と若手(永井陽之助、萩原延寿、神谷不二、塩野七生、庄司薫)で新しい人材を登用・抜擢したといえる。事実、蠟山政道、中山伊知郎、尾高邦雄、田中美知太郎、今西錦司らとは自然に会話はいつも「弟子筋の話題を含んでいた」というし、会田雄次からは野田宣雄、安保闘争以後の清水幾太郎から志水速雄と中嶋嶺雄を紹介されている(中公 一六七~一六八頁)。そのような意味では、先行世代と同世代の二段階人脈形成といえるような交際の中で編集者がどのような「筆者とテーマの選択的構成」をするかが、編集者の仕事と思想を見ていく際の一つの指標になろう。

こうした粕谷の編集活動を可能にした最大の要因は、粕谷に対する嶋中鵬二の重用である。粕谷が入社すると嶋中は『中央公論』向きのやつが入ってきた」と喜び、文藝春秋に粕谷をよく連れて行った(作家 六一～六二頁)。「進歩的文化人への不信」をもっていた嶋中²⁵が『中央公論』編集長(五四年一一月号～五七年一〇月号)だった初期に福田恆存の「平和論の進め方についての疑問」を巻頭論文に掲げ、粕谷も入社試験の面接で福田論文を面白かったと述べたのは前述の通りである。そして粕谷が『中央公論』編集部にいた五五年七月から五七年二月の期間は、全て嶋中の編集長時代であり、ここで多くの筆者を嶋中から粕谷は紹介され、面識を広げたはずである。粕谷自身、「当時の編集長であった嶋中鵬二氏とは基本的にイデオロギーに関する認識において共感するところが多かった」と言及している(中公一九三頁)²⁶。

『中央公論』は、「風流夢譚」を掲載して解体の処遇を受けた竹森清編集長時代など別の可能性を大きく有していたが²⁷、嶋中事件直後の一連の巻頭論文に現れているように、嶋中から粕谷への橋渡しが強くにじみ出ている。実際、嶋中は「粕谷君は学生時代から蠟山政道氏に師事し、はっきりした思想をもっている。それは吉野作造以来の民主主義であり、これこそが『中央公論』の源流である」と発言し²⁸、粕谷はジャーナリズムで活躍し国家権力の抑圧を受けたという面で吉野作造から河合栄治郎の系譜を意味づけている(河合 二三五頁)。このように嶋中と思想的親和性をもちながら、河合栄治郎、河合の若き友人であった蠟山政道、河合ゼミ出身の猪木正道の影響を強く受けた粕谷は、「古風な自由主義者の忤」(六〇年九月号三六〇頁)と自称した文学畑出身の嶋中鵬二と比べてより明確にマルクス主義への対抗意識をもっており、高坂正堯らその弟子世代と共鳴して次節に見るような『中央公論』誌上の「現実主義」論調を現出せしめたのである。

その嶋中と粕谷の周囲には蠟山政道、松本重治、中山伊知郎、東畑精一、笠信太郎らが中央公論社の外戚や親戚づき合いのように接していた(中公 五四頁、作家 六五頁)。蠟山、中山、松本は軽井沢での古くからのゴルフ仲間であり、蠟山と松本の別荘は至近である(都会 三八頁)。中山と東畑はともに師事したボン大学のシュムペーターの留学先で出会っている(思潮 二四八頁)。蠟山政道は、鵬二の父であり先代の社長である嶋中雄作が設立した民間アカデミーである国民学術協会でも主導力を発揮したというし(中公 五四頁)、蠟山は戦後『中央公論』が再発足する際に短期間ではあったが、中央公論社の副社長と『中央公論』主幹を務めた²⁹。こうして嶋中雄作から築かれた人脈が、嶋中鵬二と粕谷一希によって中央公論社の組織人脈に結晶した。一九六六年から始まる吉野作造賞の初期の選考委員(蠟山政道、松本重治、笠信太郎。笠の死後は中山伊知郎に交代)はその一つの完成形といえよう³⁰。

三 「現実主義」論調の登場と展開

最終節では実際に粕谷が次長時代に掲げた「現実主義」論調の論文内容を検討する。まずそれがいかに新しい潮流であったのか、嶋中事件前後のそれぞれ五年間を抽出して『中央公論』と『世界』の両誌の巻頭論文の著者の登用数を比較し、その変遷を明らかにする。次に粕谷が次長時代に最も交流があった高坂正堯、萩原延寿、永井陽之助との出会いや執筆論文に触れた上で、当時『中央公論』で展開された「現実主義」論調の代表的な論文と見なされた高坂正堯「現実主義者の平和論」、衛藤藩吉「日本の安全保障力をどう高めるか」、永井陽之助「日本外交における拘束と選択」の内容を紹介する。そしてそれらに対する批判を押さえながら、「現実主義」論調の特徴と、「現実主義」と「理想主義」の対話の可能性を考察したい。

本来ならば、『中央公論』と『世界』の執筆者を全て数えなければ精確とはいえませんが、指標として一九五六～六〇年（前半期とする）と一九六三～六七年（後半期とする）のそれぞれ五年間で両誌が巻頭論文にどのような筆者を登用したのかを見ることにする³¹。時期区分の根拠は、後述する通り「現実主義」論調の嚆矢は六三年一月号に掲載された高坂正堯「現実主義者の平和論」であり、次長時代の終わる六七年までの五年間を粕谷の主導期と考えるからである。既述したように六一年に嶋中事件が起り、同年は粕谷は嶋中鵬二が重視した学者を起用し、六二年頃にスランプを経験しており、六三年以降の方が粕谷による影響の特色が明確に表出していよう。嶋中事件以前は、安保闘争を頂点とする六〇年から同様に五年間を機械的に遡及して、五六～六〇年を比較対象とした。

前半期と後半期で『中央公論』と『世界』にそれぞれ二回以上巻頭論文を寄せた執筆者を図示すると以下のようなになる。

前半期で『世界』の執筆者の方が多なのは、『世界』五九年一〇月号と六〇年二月号に共同討議があるためである。前半期、『中央公論』と『世界』ともに巻頭論文が一回以上掲載された執筆者は、中野好夫、堀田善衛、加藤周一、鶴飼信成、久野収、都留重人、荒瀬豊、渡部誠毅、小野義彦、丸山眞男、嬉野満洲男の一名である。後半期になると両誌ともに巻頭論文を一回以上執筆したのは、笠信太郎しかいなくなる。

前半期	『中央公論』	『世界』
六回		都留重人、清水幾太郎
五回		南原繁
四回	堀田善衛	石川滋、大内兵衛、鶴飼信成、福田歆一
三回	田中美知太郎、谷川雁	入江啓四郎、山川均、矢内原忠雄、小林直樹、加藤周一、斎藤真、中野好夫
二回	梅棹忠夫、永井道雄、邱永漢、福島新吾、埴谷雄高	木村禧八郎、有沢広巳、上原専禄、恒藤恭、辻清明、荒瀬豊、石田雄、石本泰雄、久野収、坂本義和、篠原一、隅谷三喜男、中村隆英、日高六郎、堀田善衛、丸山眞男

後半期	『中央公論』	『世界』
六回	高坂正堯	
四回	永井陽之助	大内兵衛
三回	神谷不二、若泉敬	坂本義和、日高六郎
二回	松本重治、上山春平、萩原延寿、富永健一、衛藤藩吉	都留重人、久野収、小幡操、我妻栄、中野好夫、福田歆一、宮沢俊義、斉藤孝、野口雄一郎

もちろんこれはあくまでも巻頭論文の執筆者だけを集計した結果であるから、他の論文の執筆者を計上すれば、共通性はもっと増すに違いない。しかし、傾向として推測できる点は、前半期は両誌ともに執筆する筆者が多かったのに対して、後半期は棲み分けるように両誌でそれぞれ異なる筆者の登用が多くなったことである。このことは知的共同体としての「論壇」の輪が狭まったことを意味した³²。それだけでなく『世界』は前半期と後半期で登用した筆者に一貫性が見られるのに対して、これもあくまでも傾向という留保はつくが、『中央公論』は前半期と後半期で二回以上巻頭論文を書いた筆者が全く異なっている。同誌で両期に一回以上巻頭論文を書いたのは笠信太郎、永井道雄、松本重治、中根千枝、中山伊知郎である。ここに嶋中事件後の『中央公論』の粕谷の「論壇」誌面の主導の一端と思想の科学研究会を中心とした同誌への執筆拒否の影響が確認されよう。一方、後半期の『中央公論』で重用された高坂正堯は『世界』に一回も掲載論文はなく、永井陽之助と萩原延寿も六〇年代には『世界』に執筆したものは認められない³³。

実際に六三年から六七年において『中央公論』で巻頭論文を最も多く書いたのは高坂であり（六三年一月号、同年八月号、六四年九月号、六五年七月号、六七年八月号、同年十一月号）、それはまさに「高坂正堯の時代」と呼べそうな勢いを有していた。それとともに六三年の『中央公論』には九月号から林房雄「大東亜戦争肯定論」の連載（最終回は六五年六月号）が始まった。「大東亜戦争肯定論」は編集部員の利根川裕の企画であり、粕谷は自分が関わった「大東亜戦争の思想史的意義」という「自己抑制の利いた上山春平氏の主張と、肯定論という野放図な発想では、かなり距離があるように思って、私の心中は微妙なものがあつた」（中公一三七～一三八頁）が、結果として六三年は『中央公論』の論調の一層の変容を社会に印象づけたと思われる³⁴。それに対して後半期の『世界』は、巻頭論文とは限らないが、坂本義和、日高六郎、関寛治、篠原一らを登用し、大勢において「現実主義」批判を展開した³⁵。「ひとつの『現実主義』批判」と副題を付した坂本義和の『力の均衡』の虚構』（『世界』一九六五年三月号巻頭論文）はその代表格である。

ここで「現実主義」論調の内容に入る前に、粕谷と高坂正堯（一九三四年生まれ）、萩原延寿（一九二六年生まれ）、永井陽之助（一九二四年生まれ）との出会いと主要論文の経緯について述べておく。高坂、永井はハーバード大学、萩原はペンシルヴァニア大学とオックスフォード大学という欧米での留学・研究経験をもっており、萩原は「現実主義」論者とはいえないが、三人ともに政治学の素養と視点をもっていた。また三人は吉野作造賞の受賞者でもある。かれらは粕谷の着目によって「論壇」に大きく登場する機会を得たといっている。

粕谷が高坂に出会ったのは六二年初秋の頃のような。国際文化会館に勤めていた蠟山道雄（蠟山政道の長男）からハーバード大学の留学を終えたばかりの高坂の存在を教えられたのがきっかけだ。粕谷は「高坂正堯の息子だったら、戦後民主主義や戦後社会について多少、普通の学者とはちがう感想をもっているかもしれない」という予感を抱いた。高坂と会って、高坂がハーバードで丸山眞男と何度か議論をする機会があったが、意見が一致しなかったことを粕谷は聞き、それを論文にしてほしいと高坂に頼んだ。それは丸山批判ではなく、坂本義和と加藤周一の論文批判であったが、こうして「現実主義者の平和論」（六三年一月号巻頭論文）が誕生する（中公一四〇～一四一頁）³⁶。笹原編集長に巻頭論文扱いを進言したのも粕谷であった（作家一二七頁）。二八歳の高坂を新年号の巻頭論文に大抜擢したのである。同じく六三年は、後に『高坂正堯著作集』の編集委員の一人になる五百旗頭真が京都大学法学部に入学した年でもある。五百旗頭は猪木正道ゼミだったが、大学二回生のとき高坂正堯の予備ゼミにも入っている³⁷。

その後、粕谷は、高坂からハーバードの図書館で奉天総領事時代の吉田茂の資料を読んだときの話を

聞き、吉田茂の評伝の執筆を依頼した。松本重治の助力もあり、吉田茂との面会を果し生れたのが、高坂の「宰相吉田茂論」(六四年二月号)である(中公一四二～一四三頁)。そして今度は高坂が書きたいと提案して、掲載されたのが高坂の「海洋国家日本の構想」(六四年九月号巻頭論文)であった(作家一三〇頁)。高坂がインパクトをもったのは、『中央公論』六四年一〇月号の「特集 戦後日本を創った代表論文」の一八本中の一本として「現実主義者の平和論」が選ばれ再録されたことも大きかったと考えられる³⁸。この号では、選考委員の一人である永井陽之助が丸山眞男「超国家主義の論理と心理」と坂口安吾「墮落論」を推し、萩原延寿が「超国家主義の論理と心理」の読後感の「衝撃と戦慄」を解説で記している。中村智子によれば、この特集号は、「風流夢譚」掲載号を別として「返品率戦後最低記録」の売れ行きを示したというから、多くの読者に改めて高坂の存在を知らしめたはずである³⁹。同年五月には、『『現実』主義の陥穽』を含む丸山眞男『現代政治の思想と行動』(未来社)の増補版が刊行されている。六五年一月一日には中教審の「期待される人間像」の中間草案が発表される。その座長は正堯の父である高坂正顕であった。六六年八月には高坂正堯の『国際政治』、同年九月には入江昭の『日本の外交』が中公新書で出版される。坂本義和『核時代の国際政治』(岩波書店)の刊行は六七年五月である。七八年には、選考委員の中山伊知郎が強く推して、高坂は『古典外交の成熟と崩壊』で吉野作造賞を受賞した(作家一八三頁)。

萩原延寿と出会ったのも粕谷は高坂と同じ頃だったという(作家一三四頁)。萩原は五七年に留学し、手に入れる限りの新聞を読み漁ったものの日本の安保闘争を直接は経験せず、六二年九月に帰国した⁴⁰。萩原の初期の担当は、大学時代大江健三郎の同期でもあった埴嘉彦であるが(八五年二月号五八頁)、埴を訪ねて不在だったとき、粕谷が萩原に対応したのが出会いのきっかけである(中公一四六～一四七頁)。以来、粕谷は萩原の「執筆した文章のほとんどすべてに立ち会った⁴¹」。萩原の初期の執筆のほとんどが『中央公論』を舞台とし、「日本知識人とマルクス主義」(六三年一二月号)、「日本社会党への疑問」(六四年三月号)、「首相池田勇人論」(六四年七月号巻頭論文)、「革新とは何か」(六五年二月号巻頭論文)、「『対決』派の登場」(六五年一二月号)、「停滞的英国と進歩的日本」(六七年三月号)らを発表した。六八年には『馬場辰猪』で吉野作造賞を受賞する。

一方、永井陽之助は既述の通り、『思想の科学』の論文掲載で粕谷は面識をもっていたが、対話を深めたのは永井が粕谷から「特集 戦後日本を創った代表論文」の選考委員を依頼された頃である(八五年二月号五五頁、中公一五四頁)。そして永井は粕谷と「何度か、熱っぽい論議をかさね、つよく評論を書くこと要請され」、粕谷の「異常な熱意と協力」で「ほぼ一年間のうちに三五〇枚におよぶ論文」を執筆した⁴²。すなわち「米国の戦争観と毛沢東の挑戦」(六五年六月号巻頭論文)、「日本外交における拘束と選択」(六六年三月号巻頭論文)、「国家目標としての安全と独立」(六六年七月号巻頭論文)である。これらは論壇時評で田中美知太郎や猪木正道から評価を受け(八五年二月号五六頁)、とりわけ「日本外交における拘束と選択」は福田恆存や三島由紀夫からも激賞を受けた。上記三論文を一著に所収した『平和の代償』は、蠟山政道、笠信太郎、松本重治も一致して六七年の吉野作造賞に選出されたのである(中公一五五頁)。

後に粕谷は編集長を務めた『外交フォーラム』で、「安全保障の観念が、日本の世論や知識社会に定着していったのは一九六〇年代、高坂正堯氏の『現実主義者の平和論』、衛藤瀋吉氏の『日本の安全保障力をどう高めるか』、永井陽之助氏の『平和の代償』といった著作活動が広い影響力を獲得していったからである⁴³と述べているように、同時代の批判者からもそう見なされていた⁴⁴。ここでは、粕谷が指摘した高坂、衛藤、永井の代表的な論文の内容をまず紹介し、次にそれらに対する批判を踏まえなが

ら「現実主義」論調の特徴を検討したい。

前記したように高坂の「現実主義者の平和論」(六三年一月号巻頭論文)は、『世界』に掲載された加藤周一「中立と安保条約と中国承認」(五九年四月号)と坂本義和「中立日本の防衛構想 日米安保体制に代わるもの」(五九年八月号)への批判であった。高坂は、かれらが核兵器の危険性を強調するあまり在来兵器の役割を無視し、安保条約が極東に勢力均衡を成立させ戦争の防止に役立っていることを論じていないと主張した。それはかれらが権力政治の理解が不十分であるという高坂の考えに基くものである。ただ、同時に高坂は、中立論が外交上の理念の重要性を強調することで、国際政治に価値の問題を導入した貢献面を評価する。高坂は、価値の問題が「現実主義」を現実追随主義や冷笑主義にさせない防波堤になると考えており、日本が追求すべき価値は憲法第九条に規定された絶対平和であることに同意する。

しかし高坂は、その実現の手段は「理想主義者」の主張する中立論ではないと説く。中立化は、権力政治的な力の均衡による平和を崩すギャンブルでしかない。日本外交の目的は極東の緊張緩和にあり、その際、彼が重視するのは、道義的な立場から論じる中国との関係改善ではなく、アメリカとの提携を続けながら、中国を「敵には廻さない」(四七頁)議論である。その極東の緊張緩和のために高坂は具体案(手段)を五点提起した。第一に、中国との国交正常化で、台湾の問題は沈黙すること。第二に、朝鮮半島の兵力凍結と兵力削減、そして朝鮮の統一に武力的手段を禁じる協定を結ぶこと。第三に、自衛隊承認決議(自衛隊の地位の正常化)と合わせて非核武装宣言を行うこと。第四に、極東ロカルノ方式による集団安全保障体制の検討。第五に、朝鮮における兵力引離しとともに日本から米軍の漸進的撤退をさせることである。こうして高坂は、「理想主義者」に対して「現在なすべき共通の仕事がある」(四九頁)ことを訴えたのである⁴⁵。

次に満鉄の奉天図書館長を務めた衛藤利夫を父にもつ衛藤瀋吉(一九二三年生まれ)の右の論文に触れる。「日本の安全保障力をどう高めるか」(六五年五月号)は、坂本義和とともに六六年の第一回吉野作造賞に選ばれている。前節で述べたように、粕谷が次長時代に強力に押し出した執筆者の中に衛藤の名は含まれているが、この論文が粕谷の担当であったのか、粕谷と衛藤はどの程度交流があったのかは粕谷の著作からはうかがえない。粕谷が憧れた『世代』の編集長遠藤麟一朗と衛藤が一高時代の同期という記述が目につく位である(遠藤 一二六頁)。衛藤の「日本の安全保障力をどう高めるか」の内容は、衛藤自身のまとめの一文「日本の安全保障は、安保体制の強化や、自主核武装によって達成されるのではなく、国民の福祉厚生と、徹底した平和維持政策の遂行によって、安全保障に対するナショナル・コンセンサスを確保する方向に求めらるべきである」(一二三頁)という部分に要約されている。

衛藤の議論で最も特徴的なのは、「国民のたましい」とナショナル・コンセンサス(国民的共感)の重視である。いくら優れた装備をもとうが、「国民のたましい」が国民一般と自衛隊になれば防衛力は著しく落ちるからである。そして衛藤は、対中関係から見て、日本の米軍基地を有する日米安保体制には緊張関係を激化させる点で若干懐疑的であり、「最も安価で最も有効な安全保障政策」を自主的外交に求める。その外交上の取引能力を高める要素にナショナル・コンセンサスと経済力技術力の優位を想定するのである。日本国家の進路は、戦前の軍艦ではなく安全運行を第一とする商船にあると提起した。そのナショナル・コンセンサスを得るためには強制の方法は通用せず、政府が「護るに足る社会体制と文化体系を創造して行くより」(一一二頁)なく、「国民の福祉厚生の上と、真の平和愛好政策という路線を政府が志向するかぎりにおいて」(一二二頁)それは実現すると彼は考える。こうした抑止力向上の検討を、軍事的側面からしか考えない者に投げかけたのである。ただし、衛藤は非武装中立、安保

条約の即時撤廃の立場は取らないし、自衛隊の即時廃止も不可能という意見である。具体的な政策としては、日本は米中紛争に巻き込まれることを極力回避し、日中間の接触を増やしていくことを提案した。

そして永井陽之助の「日本外交における拘束と選択」(六六年三月号巻頭論文)である。同論文は、現在の日本外交が取りうる選択肢を提示しながら、進むべき道を考察したものである。題名に含まれる「拘束と選択」という配置からも、問題意識の力点は前者に置いている。永井は、日本の各政党内にある「対中国接近ムードという外交姿勢」、国民にある『『自主外交』への茫漠たる期待や、対米従属外交への反発ムード』に不安を感じていた。そして多くの情報を持ちながら石橋を叩いて渡らない外務官僚の保守主義(「無為の蓄積」と、何も知らないために「何でも可能」と思い込み、自主外交を叫ぶ一般国民のムード(「全能の幻想」)の乖離により、戦前と同じ過ちを冒すのではないかと危惧したのである。

この悪循環を断ち切るために、日本外交を拘束する様々な条件の中から可能な選択肢は何かを論じていく。ベトナム戦争を契機に中ソの対立が増大するのは、日本外交の選択の可能性において好機であり、中期目標として永井は、中国との国交回復と正常な外交関係の確立を据える。その際の戦略は、多角的オプションを可能にする迂回的、間接的アプローチである。従って永井にとって軍事力も「国家行動の選択に広いオプションを与え、イニシアチヴを失わないための、一手段にすぎない」(六九頁)。代償の要求なき平和論や中立論はあり得ず、日本の潜在的な脅威の序列を考えると、第一に米国、第二にソ連、第三に中国になるため、その優先順位によって友好関係を持続すべきと主張した。「国際政治は、幼稚園の遊戯ではないから、みんな仲良く」というわけにはいかないので、「味方を極大化しうるように、敵を選択しなければならない」(六九～七〇頁)のである。上記の優先順位からもわかるように永井は米ソと比べれば、現状では中国を戦略上の「敵」と想定しているように思われる。ただし、中国との国交回復を中期目標としている以上、中国との民間レベルでの交流の拡大、政経分離と政教分離による最小限度の経済交流の維持、一つの台湾と一つの中国という路線での中国の国連加盟の方向への努力の必要性を長期的な対中政策にあげている。

日本の防衛問題の結論として永井は六点に要約した。第一に、核武装は選ばず米国に対して政治的な信頼感と安心感を与えること(防衛費は国民所得の二%程度にする)。第二に、中国の核脅威の増大に対して米国の核の傘に入る以外に道はないこと(ただし本土と沖縄の核基地化は絶対に反対)。第三に、米中ソ間の緊張緩和に努めながら日米安保体制を次第に有事駐留の方向にすること(同時に日本の通常兵力の質的な拡充と補充が必要)。第四に、どんな国の核恫喝にも一種の不感症と無関心を決め込み、核削減や軍縮などの平和運動を大規模に行うこと。第五に、核開発の技術水準は平和的手段で保持すること。第六に、外交行動に資するための大規模な情報処理センターと軍縮・戦略研究所を創設することである。

このような高坂、衛藤、永井の主張に粕谷は強く共感したに違いない。粕谷は二六歳のとき『中央公論』の部員後記にこう記していた。「米国帝国主義→従属体制→基地反対→平和勢力→ソ同盟。こうした連鎖反動的思考形式がいかにか多かつたことか。国際政治の激動を前に、今こそリアルな認識を踏まえた上で、発展と方向を自覚できるような思考が芽生えて欲しいものだ」(五六年一二月号三九四頁)。安保闘争時に粕谷が本間長世にペンネームで「ある後衛の弁」という少数派の意見を書いてもらった状況とは、時代は大きく異なっていた。当然ながらそれは高度成長の到来ということになるが、衛藤藩吉はそれを「現在の日本国民の大多数は、十分とはいえないまでも、かなり多くの『失うべきもの』をもっている」(六五年五月号一三頁)と表現する。あるいは萩原延寿は、現在獲得している財産目録(憲法、議会民主制、思想の自由など)を認識する重要性に言及した(六五年二月号五九頁)。「現実主義」が「よく

いわれるような権力亡者の論ではない。それは、人間の強さだけではなく、むしろその弱さ、つまり、今ある富や安全が失われる不安や恐怖を基にした議論⁴⁶であるとすれば、空襲や敗戦で受けた喪失感を人生の出発点とした「保守的懐疑派」を自認する粕谷にとって共鳴する要因が大きいものだったといわなければなるまい。

ただ、もちろん「現実主義」論調と一口にいても、高坂、衛藤、永井にしても時代によってその考えを変化させたであろうし、三人それぞれの主張もニュアンスを異にしている。篠原一が指摘するように、三者の中では永井陽之助が最も「軍事リアリズム」の観点が濃厚である⁴⁷。また、衛藤は日米安保体制の重要性を認めながらも、その危険性も同時に主張しており、国家への献身につながる論理をはらむ「たましい」という用語の連呼はあるにせよ、どちらかといえば「理想主義」の考えに近い点も多かった。そうした各人の相違点は関寛治によってよく整理されている⁴⁸。

総じていえば、坂本義和がいうように「現実主義」論調は、政治的には保守的機能を有するものであった。すなわち「資本主義的経済合理性の角度から、安保体制を過去にさかのぼって肯定しようとする点」と「大衆運動の政治的意義を極小化しようとする」点においてである⁴⁹。また「現実主義」論調の具体的な提案は、日中国交回復、日本からの米軍撤退の要求、日本の核武装の否定、極東ロカルノ方式、平和部隊の創設といった主張は、「理想主義」の立場と重なるものである。それは高島通敏がいうように池田首相の内政と同様に「平和論に対しても基本的に宥和政策をとった」のである⁵⁰。この点からいって、両者による対話の可能性を井上寿一は指摘しつつ、「現実主義者」と「理想主義者」の決定的な差異は、「〈戦前〉体質」を払拭できたかどうか、「日本の民主化の程度をどのように測定するか」にあり、両者が「この問題で認識のギャップを埋める努力」を怠ったことが対話の成立を妨げた原因であると位置づけている⁵¹。

そういう意味では、同時代の伴奏者であった萩原延寿が「歯ざしりをする思いである」という一文から始まる「革新とは何か」(六五年二月号巻頭論文)という論考は看過できない視点を発揮していた。萩原は、革新が社会主義と同一視されている言葉の混同を批判し、保守的な社会主義者が多い現状で、マルクスが述べた「革新的であるというのは、物事を根底にまで遡って理解することである」(五二頁)という定義の意味を改めて問うている⁵²。そして「過去」と「未来」の間を往復しやすい革新は、保守との対話を通して「現在」の認識を深めるべきであり、社会党には革命ではなく改良を目指す転換を求めた。そうした萩原が革新とって想起するのは、吉田松陰の海外渡航の企てに代表されるような既成の価値からの離脱(脱藩)と異なった現実や思想との対決(諸国周遊)であった。その上で、新しい認識の次元の開拓者である知識人は革新的でしかありえないと断言するのである。続く「『対決』派の登場」(六五年一二月号)では、「日本が中立主義の立場を貫く積極的な意味はますます増大してくる」(七〇頁)という認識を萩原は示した。その中立主義とは、「容易には『去就』を決めないことによって、敵と味方との間に存在する硬直した壁を取り払い、その空間に『妥協』という政治的果実を結晶させようとする不断の努力をいうのである」(六八頁)。このような萩原の丁寧で粘り強い根源的な思考が、当時の「論壇」でどのような感度の下に受け止められ、継承されてきたのか。つまり萩原のような異なる立場の対話をつなぎうる存在をどれだけ「論壇」は正面視できていたのかということだ。そこに現在まで持ち越された思想的課題があるように思うのである。

おわりに

以上、本論で述べてきた編集者試論のまとめとして粕谷一希から考察できる問題提起を述べておきたい。総合雑誌の編集者として粕谷の大きな特色は、結果として「現実主義」論調の形成を果したことに求められる。論調というからには、高坂正堯という発火点の執筆者がいたにせよ、それは一人の執筆者だけからでは言論の生産性という意味からいっても、一つの潮流を形成することは容易ではない。無論、編集者は多くの執筆者と面識を得て、そのうち時代に強い衝撃を残す執筆者と深い交際をもつこともあろう。しかし、多くの編集者と粕谷が違うのは、新しい同世代に近い執筆者たちとの交流の機会を積極的につくり、ある一人の代表的な執筆者とのつきあいに止まらず、次長時代に中公サロンを試みたように幅広い執筆者陣を形成したことである。

事実、粕谷は「編集とは筆者とテーマの選択的構成」であり「そこに編集者の個性も現れる。媒介者である編集者は、筆者とテーマを結びつけ、筆者と筆者の出会いを工夫し、それぞれが新しい発展となる存在でなければならない」という（編集一三頁）。そして「人材の組織化というか、サロンをいかにつくるかという人間関係のほうが大事であって、誌面はその反映ということですね。サロンのなかで言っていることで誌面に出にくいこともあるけれど、サロンに接しながらその問題を考えていくことが大事であって、それをうまい時期に効果的に出すことがわれわれの役割だろうという気がするんですね」と述べていた⁵³。編集者と筆者の一对一の関係だけではなく、筆者同士の交流の創造を強く意識していることがわかる。すなわち、先行世代から同世代に渡る二段階人脈形成の過程において、新しい問題意識をもつ同世代の執筆者陣でグループをつくり交際することで、ある編集者が一つの論調をプロデュースする大きな要因になるというモデルを粕谷は示しているのである。

今後の課題としては第一に、本論で粕谷の思想形成に見られる人的系譜と、一九六三年以後の『中央公論』で「現実主義」論調の執筆者が多用される様を通じて間接的に影響力があることを論じてきたが、「現実主義」が実際どの程度影響力があったのかはより直接的に実証されなければならないと考える⁵⁴。

第二に、「現実主義」論調の潮流を時代状況の文脈の下で改めて人的系譜や思想史と併せて考察することである。福田恆存、林健太郎、小泉信三らと、高坂正堯や永井陽之助らの「現実主義」論者がどのような共通性と相違点をもつのかを丁寧に位置づけていかなければなるまい⁵⁵。

第三に、総合雑誌の編集者研究を前進させるため、『中央公論』編集部内の他の編集者と他誌の編集者（例えば臼井吉見や池島信平）との比較を通して編集者の思想のダイナミズムを連関的に明らかにすること。第四に、教養主義⁵⁶と保守主義⁵⁷の先行研究をどのように粕谷一希研究ないしは編集者研究に合流させていくかということである。

最後に、鶴見俊輔と吉田満の対談「『戦後』が失ったもの」（『諸君！』一九七八年八月号）で発生した粕谷一希と鶴見俊輔の論争から、鶴見が粕谷に回答したメッセージに触れておきたい。鶴見俊輔は粕谷に対して「保守的懐疑主義」の立場から「みずからの現在の思想にたいしてうたがいをもち、そのうたがいが自分のうしろだてとなっている国家に及ぶような」疑念をもつあり方を希望した⁵⁸。そこに「保守的懐疑派」として新しい認識を切り開く「革新」の道筋が示されている。

粕谷は「論争が成り立たない日本の論壇・文壇の体質を改めたいという気持ち」を強くもっていた（作家二一七頁）。粕谷の言葉でいえば、異なる立場の者同士の「敬意と異論」を兼ねた対話・論争ということになる⁵⁹。しかし、実際の粕谷の編集は日本文化フォーラムや日本文化会議のメンバーを執筆者の中心とした。そうした保守主義や「現実主義」の論者と異なる『思想の科学』事件による執筆拒否者

の解除に向けた積極的な試みは見られず、わずかに高坂正堯の登場の際に坂本義和に反論を求めた行為が目につく位である。ただし、確かに粕谷は高坂正堯や永井陽之助らを大きく用いてきたにせよ、同時に本論で述べたように萩原延寿の才をも重んじたことを忘れるべきではない。当時萩原の主張に応答しなかった側の責任を衝く粕谷の指摘自体は説得的である（中公一四九頁、〇二年一月号三三六頁）。異なる者同士の対話可能性は、粕谷が登用した萩原の仕事に現れていた。それこそ編集者粕谷一希から汲めるもう一つの本領であるに違いない。

粕谷一希主要文献

※月日まで記載していないが、発行順に列挙。引用・言及した文献に限り、典拠を示す際の略記した表示名を括弧内に示した。

- 粕谷一希 『二十歳にして心朽ちたり 遠藤麟一郎と「世代」の人々』（新潮社、一九八〇年）〔遠藤〕
- 粕谷一希 『戦後思潮 知識人たちの肖像』（日本経済新聞社、一九八一年）〔思潮〕
- 粕谷一希 『対比列伝 戦後人物像を再構築する』（新潮社、一九八二年）〔対比〕
- 粕谷一希 『河合栄治郎 闘う自由主義者とその系譜』（日本経済新聞社、一九八三年）〔河合〕
- 粕谷一希 『都会のアングル』（TBSブリタニカ、一九八三年）〔都会〕
- 粕谷一希 『面白きこともなき世を面白く 高杉晋作遊記』（新潮社、一九八四年）〔高杉〕
- 粕谷一希 「菊池寛」（丸谷オ一〔編〕『言論は日本を動かす 風俗を変革する』第一〇巻、講談社、一九八五年）
- 粕谷一希 「解説」（粕谷一希〔編〕『言論は日本を動かす 言論を演出する』第七巻、講談社、一九八五年）
- 粕谷一希 『東京あんとろぼろじい 人間・時間・風景』（筑摩書房、一九八五年）〔東京〕
- 粕谷一希 「解説」（粕谷一希〔編〕『言論は日本を動かす 体制に反逆する』第六巻、講談社、一九八六年）
- 粕谷一希 『対談書評 歴史の読み方』（筑摩書房、一九九二年）〔対談〕
- 粕谷一希〔編著〕『メディアの迷走 誇りなき報道が国を亡ぼす』（PHP研究所、一九九四年）
- 粕谷一希 『中央公論社と私』（文藝春秋、一九九九年）〔中公〕
- 粕谷一希 「今甦らせるべき自由主義の思想」（河合栄治郎研究会〔編〕『教養の思想 その再評価から新たなアプローチへ』社会思想社、二〇〇二年）〔今甦〕
- 粕谷一希・寺田博・松居直・鷲尾賢也 『編集とは何か』（藤原書店、二〇〇四年）〔編集〕
- 粕谷一希 『鎮魂 吉田満とその時代』（文春新書、二〇〇五年）〔吉田〕
- 粕谷一希 『反時代的思索者 唐木順三とその周辺』（藤原書店、二〇〇五年）〔唐木〕
- 粕谷一希 『作家が死ぬと時代が変わる 戦後日本と雑誌ジャーナリズム』（日本経済新聞社、二〇〇六年）〔作家〕

- 基本的に『中央公論』の引用・言及は、誌名は省略し、発行年は下二桁で表記する。引用の際は、旧字体の漢字は新字体で表記した。
- ただし、粕谷一希の著作には、吉野作造賞を創設したという言及は見られないように思う。
- 高坂正堯『海洋国家日本の構想』（中央公論社、一九六五年）一八七頁。
- 粕谷一希「戦後史の争点について」（『諸君！』一九七八年一〇月号）一〇三頁。
- 粕谷の全単行本を含む主要著作から引用・言及する場合は、煩雑なため本稿末尾に掲載した粕谷一希主要文献の略記に基き、当該頁を示す（都会は『都会のアングル』からの引用）。粕谷夫妻が金婚式の記念で出した句集『ざんなん』（出版社不明、二〇〇七年）は筆者は未見である。
- 中川六平「現代の肖像 粕谷一希」（『AERA』一九九七年三月二四日号）六〇頁。
- 同前書六〇頁。
- 粕谷一希「愛国心とは何か」（『思想の科学』一九八三年六月号）四〇～四一頁。
- 同前書四〇頁。
- 粕谷の妻小野津幸子の著書『選挙民はエイリアン』（日本図書刊行会、一九九三年）を見ると、粕谷の母親は豊島区議会議員（自民党）を三二年間務め、議長にもなったことがわかる（同書二二、四五、一九九頁）。筆者が豊島区議会事務局に電話したところ、粕谷の母である粕谷みや子は一九五一年四月三〇日から一九八三年四月三〇日まで豊島区議会議員（一九七六年九月から一九七七年九月までは議長）を務めたとのことである。筆者が確認した限り、自身の母親が長らく議員であった点に粕谷は一言も触れていない。
- 「私の卒業した都立五中の創設者・伊藤長七の事蹟を調べ、『七十年史』の創立のころの校史を書くことを同窓会から依頼された」という記述も見られる（唐木二九五頁）。五中時代の雰囲気や、後述の遠藤麟一郎やいいだもらの人物像については、中村稔『私の昭和史』（青土社、二〇〇四年）を参照のこと。
- 高橋英夫は、『現代日本』朝日人物事典』（朝日新聞社、一九九〇年）で粕谷一希の項目を執筆している。同書四四四～四四五頁では「主として『中央公論』に在籍し、哲学的思索性に根差したりベラルな編集で、『風流夢譚』事件以後の混乱した同誌の大黒柱となった。時代現象の

背後の思潮を重視し、和辻哲郎、田中美知太郎らからうけた人格的精神性を尊重する姿勢」をもつ人物として粕谷を素描している。粕谷の出生年月日の記述も同書による。

- ¹³ 中央公論社時代、粕谷は京都出張の折は、田中美知太郎に会いに行ったというが（中公一五六頁）、その田中は「波多野精一に師事」している（思潮七八頁）。同様に粕谷は京都ではよく猪木正道の家を訪ね、執筆依頼をしたという（東京一二五頁）。
- ¹⁴ 粕谷一希・高坂節三・中西輝政「京都学派が遺したもの」（『Voice』二〇〇一年二月号）二〇一頁。
- ¹⁵ 粕谷は、清水幾太郎や丸山眞男らの「派手な活躍の裏には、どうも久野収が必ず暗躍しているようだった」として、久野を「反体制運動の裏の演出者」と見なしている（作家一三三頁）。
- ¹⁶ 『文藝春秋』二〇〇七年九月号の「同級生交歓」の頁には、一高の文科乙類の同級生として行天豊雄（国際通貨研究所理事長）、本間長世（東京大学名誉教授）、高階秀爾（大原美術館館長）、芳賀徹（京都造形芸術大学名誉学長）、粕谷一希（都市出版相談役）、清水徹（明治学院大学名誉教授）が登場している。
- ¹⁷ 『朝日新聞』の敗戦日の社説を書いた佐々弘雄の息子である佐々淳行の兄、佐々克明も後に朝日新聞社に勤めるが、克明が成蹊高校時代は『世代』の同人であった（遠藤一二頁）。一方『時代』に寄稿した佐々淳行は、土曜日には粕谷の他にも早大の藤波孝生（後の内閣官房長官）や東大の若泉敬（後の京都産業大学教授）らが仲間集っていたと記している（佐々淳行『焼跡の青春・佐々淳行』文藝春秋、二〇〇三年、二二〇～二二一頁）。
- ¹⁸ 中央公論社版創刊号から二二冊目にあたる『思想の科学』一九六〇年一〇月号の編集後記で粕谷は退任の辞を述べている。
- ¹⁹ 「風流夢譚」事件による天皇制批判がタブー化する過程等については根津朝彦『「中央公論」編集者の配置と思想』（同時代史学会〔編〕『日本国憲法の同時代史』日本経済評論社、二〇〇七年）を参照。同書には「風流夢譚」事件に関する参考文献の詳細も記されている。同事件の代表的な回想記には中村智子『「風流夢譚」事件以後』（田畑書店、一九七六年）、京谷秀夫『一九六一年冬』（晩聲社、一九八三年）がある。
- ²⁰ 京谷同前書八九頁。
- ²¹ 中村前掲書五八、六二頁。
- ²² 同前書一四七～一四九頁。
- ²³ この頃、結局話は立ち消えになったが、粕谷は中央公論社を退社して福田恆存の仲介で『自由』に転職する話もあったと石原萌記は述べている（石原萌記・奈須田敬「昭和論壇秘史」『諸君！』二〇〇二年二月号二五二頁）。なお『自由』を主導してきた石原の思想は石原萌記『戦後日本知識人の発言軌跡』（自由社、一九九九年）に詳しい。
- ²⁴ 高橋英夫『批評の精神』（中央公論社、一九七〇年）は、粕谷が示唆して高橋が『中央公論』に掲載した文章を主にまとめたものである（八五年二月号五三頁）。他にも高階秀爾『フィレンツェ』（一九六六年）、本間長世『リンカーン』（一九六八年）、芳賀徹『大君の使節』（一九六八年）

と粕谷の友人の著書が相次いで中公新書から出版されている。一九六一年か六二年頃、鎌倉の瑞泉寺で竹山道雄を囲んで本間長世、芳賀徹、高階秀爾、清水徹らは勉強会を開き、粕谷一希も招かれ、以降もこの会は断続的に続いたとあるから（東京一一二～一一三頁）、粕谷が出版担当者に紹介したことも考えられる。

- ²⁵ 嶋中鵬二『日々編集 嶋中鵬二遺文集』（嶋中雅子、二〇〇一年）四六～四七頁。
- ²⁶ 他にも安保闘争のときは嶋中に誘われ国会周辺をともに車で一周し、嶋中事件直後は笹原編集長に命じられ、数日間嶋中邸に詰めて嶋中の補佐役を務めている（中公一〇〇、一一六頁）。
- ²⁷ 根津前掲書を参照。
- ²⁸ 中村前掲書四七頁。中村は同書四八頁で「民社的な良識派」という嶋中の吉野理解を批判している。
- ²⁹ 国民学術協会については『国民学術協会の記録』（財団法人国民学術協会、一九九九年）、中央公論社の社史に関しては『中央公論社の八十年』（中央公論社、一九六五年）を参照。
- ³⁰ 後に吉野作造賞の選考委員になった辻清明は、蠟山政道門下であり、五四年から『中央公論』編集長を務めた嶋中鵬二より、同誌巻頭言の執筆を依頼され担当している（嶋中前掲書三四〇頁）。
- ³¹ 同期間の巻頭論文の著者の集計は、『中央公論総目次』（中央公論社、一九七〇年）と別冊『世界 総目次』（岩波書店、二〇〇六年）による。『中央公論総目次』では、特集論文が目次の最初に記載されることがあるが、実際に最初の頁数に掲載されている主要論文を巻頭論文と見なした。『世界 総目次』では各論文の頁数の表記がないため目次の最初に記載されたものを巻頭論文とした。なお両誌ともに巻頭座談会も巻頭論文に含めている。
- ³² 例えば杉山光信も一九六〇年代初めまで『世界』、『中央公論』、『展望』などの執筆者が相互に重なっていることを指摘している。それが崩れた一つの原因として「経済成長が達成した『豊かな社会』のなかで人びとが日本社会の後進性を批判する進歩的文化人よりも、日本文化の先進性を語る保守的文化人の言説を好むようになっていったこと」をあげている（杉山光信『学問とジャーナリズムの間』みすず書房、一九八九年、二五～二六頁）。
- ³³ 永井と萩原は『世界』に八〇年代にそれぞれ一回登場した。衛藤瀧吉は『世界』に総計して七回登場している。『文藝春秋』に関しては『文藝春秋七十年史〈資料篇〉』（文藝春秋、一九九四年）を参照。
- ³⁴ 『中央公論』への執筆拒否者は、林房雄らだけでなく、若泉敬「マクナマラ米国防長官単独会見記」（六六年九月号）を巻頭論文にして帯まで巻いたことに対して「マクナマラ路線」という言葉まで出て、不信を強めたようだ（中村前掲書一六四頁）。
- ³⁵ ただ『中央公論』にも主流の論調ではないとはいえ例えば関寛治「勢力均衡で平和は保てるか」（六六年六月号）や田口富久治「『国益』論台頭の背景と意味」（六六年八月号）といった論考は掲載されている。
- ³⁶ なお『坂本義和集』全六巻（岩波書店、二〇〇四～二〇〇五年）を紐解けば、坂本を「理想主義」と括れな

いことは明瞭であるが、高坂が坂本を「理想主義者」と表現したことから、本稿でも便宜上対立構図を指し示すこの語彙を使用する。

- ³⁷ 五百旗頭真・前原誠司・細谷雄一「高坂正堯没後十年 遺された『責任ある国家』という課題」(〇六年一二月号)。同書によれば、一九六二年生まれと世代は異なるが、前原誠司も高坂の『国際政治』を浪人時代に読むことで影響を受け、京都大学法学部に入学して高坂ゼミに学んだとある。付言すれば、粕谷が関わった『高坂正堯著作集』全八巻の解説者は、北岡伸一、山崎正和、佐藤誠三郎、野田宣雄、塩野七生、中西輝政、中西寛、五百旗頭真であり、粕谷は全員と面識がある。このうち吉野作造賞の受賞者は八四年の山崎正和、九六年の北岡伸一、九八年の五百旗頭真であり、中西寛も二〇〇三年に読売・吉野作造賞を受賞している。
- ³⁸ 同特集の選考委員である猪木正道は、選考座談会で坂本義和に対して「僕の意見を率直に言えば、坂本君のものは価値ないと思う。国際政治を入れるとすれば、これだけが挙げられたんでは困る」ので「日本にも本物があるという意味で」高坂正堯を推した。猪木から見ると坂本は「パワーポリチックスがないというのは致命的なこと」であり、「あの時点で、防衛をよその中立国に頼むなんていう議論はショッキングな表現かもしれないが、とても正当な議論とは思えない」とし、最後には坂本の論文は「載せたっていいけれども、それにはパワーポリチックスのあるものを一本併せて載せるという条件をつけたい」と相当に粘っている(六四年一〇月号一九四頁)。これに対して坂本は自身は何度も国際政治にパワーポリチックスの側面があることを論じてきたのであるから、猪木の批判は「外交政策の評価に当って権力政治を肯定していないという点に向けられているのであろう」(傍点は原文)と切り返した(坂本義和『『力の均衡』の虚構』『世界』一九六五年三月号三四頁)。
- ³⁹ 中村前掲書一五一頁。
- ⁴⁰ 萩原延壽『自由の精神』(みすず書房、二〇〇三年)四五、三二〇、三二四頁。
- ⁴¹ 粕谷一希「〈追悼〉萩原延壽 思想と政治にジレンマに生きた男」(〇二年一月号三三三頁)。
- ⁴² 永井陽之助『平和の代償』(中央公論社、一九六七年)二二二、二二五頁。ただ三論文の目次を見るとそれぞれ一三〇枚、一二〇枚、一三〇枚と記載されているので三八〇枚の計算になる。
- ⁴³ 『外交フォーラム』緊急増刊九四号(一九九六年六月)一頁。
- ⁴⁴ 例えば丸山邦男「[^]理性としての現実主義」(『月刊社会党』一九六六年七月号)。日本共産党の機関紙『前衛』には矢留一太郎「『現実主義者』の現実的役割 高坂正堯批判」(六五年九月号)、同「『国民的同意』論の陥穽 衛藤瀧吉氏の防衛論批判」(六六年一二月号)、同「現実主義者の国際政治観 永井陽之助批判」(六九年五月号)など多数関連した批判論文が掲載されている。その他の文献についても本節で後述する。
- ⁴⁵ 粕谷は、編集部内の坂本義和の担当者K(加納信雄と思われる)を通じて坂本に反論文を求めた。坂本が実際にど

ういう対応をしたのかは定かではないが、坂本は反論・対談・面談いずれをも拒み、高坂が面会したいと粕谷が粘ると、編集部への介入なしに研究室に来るならという返事であり、粕谷は「ずいぶん尊大な態度だとムカッとした」(中公一四二頁)が、高坂は坂本と会っても対話の糸口は見つからなかったという。このことを粕谷は繰り返し言及しているので(例えば中公一四一〜一四二頁、思潮二九七頁、作家一三一頁)、根にもっていることはうかがえる。

- ⁴⁶ 土山實男「現実主義」(猪口孝ほか〔編〕『政治学事典』弘文堂、二〇〇〇年)三〇〇頁。
- ⁴⁷ 篠原一「現代における保守感情の諸形態」(『世界』一九六六年五月号)六二頁。
- ⁴⁸ 関寛治「現実主義者の国際政治観」(『朝日ジャーナル』一九六七年十一月九日号)。
- ⁴⁹ 坂本前掲書三一〜三三頁。
- ⁵⁰ 高島通敏「六〇年代の政治的現実主義」(『思想の科学』一九七五年一〇月号)八頁。
- ⁵¹ 井上寿一「日本外交史講義」(岩波書店、二〇〇三年)一八三〜一八四頁。この井上の指摘と高島前掲書の存在は、酒井哲哉「国際政治論のなかの丸山眞男」(『思想』二〇〇六年八月号)に教えられた。
- ⁵² この根源的に物事を考え直す重要性は、小田実「日米新連帯の芽を求めて」(『エコノミスト』一九六六年五月一七日号)にもはっきりと意識されていた。高島は、高坂正堯、永井陽之助、江藤淳、山崎正和と同じくアメリカ体験を有する小田実が、かれらと違い「自己を失わずに、逆に非エリートの世界としてのアメリカを発見しそれへ同一化してゆくことができる」小田の姿勢に注目している(高島前掲書一〇頁)。
- ⁵³ 粕谷一希・田中健五・安江良介「総合雑誌の世界」(『流動』一九七九年七月号)一一四頁。
- ⁵⁴ 書評紙の分析や読者研究はもとより、永嶺重敏『東大生はどんな本を読んできたか』(平凡社新書、二〇〇七年)が扱ったように学生新聞の分析、そして少なくとも全国紙の論壇時評で「現実主義」論調がどのように受け止められたかを調べる必要がある。
- ⁵⁵ また粕谷は多くの著作を残したことに意義はあるが、粕谷がある著書や人物に強い影響を受けたことは明確にわかっても、一つの作品や人物に対する評価を掘り下げて記載しない傾向があるため、本論でもそれに比例して叙述が弱い部分があったことは否めない。そのためにも『追想の蠟山政道』(蠟山政道追想集刊行会、一九八二年)、猪木正道『私の二十世紀 猪木正道回顧録』(世界思想社、二〇〇〇年)、高坂節三(正堯の弟)『昭和の宿命を見つめた眼』(PHP研究所、二〇〇〇年)といった別の関連著作を精査していくことは当然であるし、戦後『中央公論』の一つのアイデンティティを提供した吉野作造に関して嶋中鵬二の解釈像とは異なる理解も求められよう。
- ⁵⁶ 筒井清忠『日本型「教養」の運命』(岩波書店、一九九五年)、竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』(中央公論新社、一九九九年)、同『教養主義の没落』(中公新書、二〇〇三年)、高田里恵子『文学部をめぐる病い』(ちくま文庫、二〇〇六年、初出二〇〇一年)、同『グロテスクな教養』(ち

くま新書、二〇〇五年)などが代表的な研究である。

- ⁵⁷ 久野収・鶴見俊輔・藤田省三『日本の保守主義』(『戦後日本の思想』中央公論社、一九五九年)、林健太郎「解説 現代における保守と自由と進歩」(『新保守主義 現代日本思想大系三五』筑摩書房、一九六三年)、福田恆存「解説 反近代の思想」(『反近代の思想 現代日本思想大系三二』筑摩書房、一九六五年)、橋川文三「解説 日本保守主義の体験と思想」(『保守の思想 戦後日本思想大系七』筑摩書房、一九六八年)、蒲島郁夫・竹中佳彦『現代日本人のイデオロギー』(東京大学出版会、一九九六年)、

小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』(新曜社、二〇〇二年)の第五章の「オールド・リベラリスト」と第六章の福田恆存を扱った部分と第一五章の江藤淳論があげられるが、それらの先行研究を踏まえてどのように「現実主義」論調に接続するのか考究されたものは僅少であろう。

- ⁵⁸ 鶴見俊輔「戦後の次の時代が見失ったもの」(『諸君!』一九七九年二月号)五二頁。鶴見に対する粕谷の批判は、注三の粕谷前掲書。
- ⁵⁹ 粕谷前掲「戦後史の争点について」103頁、中川前掲「現代の肖像 粕谷一希」58頁。